

家庭生活事象に対する学習者の認識をふまえた授業開発 —家事労働に関する認識の変容を促す授業の提案—

鈴木明子・平田道憲・高橋美与子*・貴志倫子**
(2005年11月28日受理)

An Instruction Plan of the Class Based on the Learners' Awareness of Their Home Life Phenomenon: A Proposal of Teaching Practice to Facilitate the Transformation of Awareness about Household Work

Akiko SUZUKI, Michinori HIRATA, Miyoko TAKAHASHI and Noriko KISHI

Abstract. We developed and implemented an instruction plan that intended to transform learners' awareness about household work. We analyzed the scenario to solve problems concerning household work and the work sheet to examine awareness transformation about household work. We found some kinds of awareness transformation about household work over 90% of the students through our lessons. As a result, we recognized the learning effects of three instructional materials and group discussion. Six points of view about awareness transformation were elicited. There were gender difference concerning the willingness to acquire information and skills serve as a basis for household work.

1. はじめに

高等学校「家庭基礎」においては、70時間で広範な家庭生活事象についての学習を行わなければならない。このような短期間に教科目標に添って学習内容を構造化するひとつの方策として、生活設計の授業展開に注目した。生活設計の学習は、生活を構成している要素を統合し生活を総合的に系統的にとらえるために、他領域の学習との関連において重要な位置を占める。発達課題と学習課題に適合し、それらに接近できる生活設計の授業を構築していくためには、学習者が自らの生活実態について認識を深めるとともに、教師もその実態を把握することが重要となる。

論者らは、家庭基礎における学習者の生活時間および生活設計に関する認識を把握することを目的として、授業「1日の過ごし方(生活時間)」で使用したワークシート分析を行った¹⁾。

その結果、父親および母親の家事労働分担と団

らん時間のもち方に注目して授業設計を行う必要性を認めた。さらに、それらについて特徴的であった生徒の生活時間の実態および将来の生活時間と生活設計に関する記述について考察を行ったところ、父親が家事労働をより多く分担している環境で、生徒本人も実際に家事労働に従事している者では、生活時間の課題に対して主体的に向き合い、課題解決を行おうとする姿勢が認められた。また、家族での団らん時間が長い者では、自分のみならず他の家族員の生活時間に関する課題に対しても意識が高く、他者や社会との関係性の中で課題の解決策を考える姿勢が認められた他、将来について職業生活を自己実現のための機会ととらえる傾向もうかがえた。

本報では、生活時間の学習でそれに関連した課題を認識した後、「家事労働」について考える授業の中で、さらに各自の生活設計や1日の過ごし方に関して、課題の内容や解決方法についての認

*広島大学附属福山中・高等学校, **福岡教育大学教育学部

識を深められるような展開を試みた。授業では、
① 生徒が自分の家族との関わりや家事への参加の実態をふまえて相互に意見交換する場、および
② 限られた時間の中で家事労働に関する多様な価値に触れる機会を設けた。それによって学習者の家事労働についての認識の変容を促すとともに、その変容を学習者自身にとらえさせることにより、学習への動機付けや生活実践に対する意欲につなぐことを意図した。

福田らは、「家庭一般」において「家族・家庭生活」の学習を中核に据えて年間指導計画を立て、実際の授業において一貫して家族や家庭生活に関する価値観の形成を目指す指導を行い、約8ヶ月間の授業実施の前後に調査を行い比較検討している。その結果、自己中心的な価値観を有していた生徒が、学習後は家庭生活の価値と管理の方法の重要性を認めるなどの価値観の変容が生じるといった授業効果を報告している²⁾。

このように、家庭科において価値観の形成や認識の変容をねらう場合、単元や年間指導計画といった長期的な展開の中で、継続的に繰り返し刺激を与えることが効果的であろう。しかし一方では、1時間毎の刺激の与え方も重要である。

そこで、先述のような学習者の家事労働に対する認識の変容をねらった授業を実践し、グループによる家事労働の課題解決のためのシナリオ作りおよびワークシートにおける「家事労働に対する考えの変化」の記述を分析することにより、生徒にどのような認識の変容がみられたのか、さらにそれによって授業のねらいがどのように達成されたかを明らかにすることを本報の目的とした。

2. 授業の概要

授業は、高橋によって、2005年7月および9月に高等学校1年生を対象に実施された。分析対象は3クラスである。表1に、3クラスの人数を示す。本時が位置付けられている単元の設定理由、全20

時間の計画及び本時「家事労働について考える」のねらいと学習過程を学習指導案として示す。本時3時間は、50分と100分の構成で行われた。

3. 授業分析および考察

(1) 資料1にもとづくグループ作業における記述 1) 問題点としてあがった事柄

食生活面で、総菜、インスタント食品および加工食品の摂取が多いことなど食事の内容をあげた班は、3クラス30班中20班、栄養バランスの偏りがあると言及した班は19班であった。食事摂取の時間の問題を指摘した班は15班、朝食に問題があるとした班20班、調理に時間をかけない、総菜をそのまま食べることといった食事の仕方の問題2班、夫の夕食の取り方の問題2班、食生活の乱れという表現でとらえた班は3班であった。

一方で、個食の問題も含むコミュニケーション不足を指摘した班は25班、家事分担に問題があるとした班は19班であった。これらは、家族員相互の関与の仕方の問題である。また、2つの班が指摘している長男の生活時間の問題、先述した食事摂取の時間の問題とともに、個人および家族員としての生活時間、その共有の仕方の問題とも関連している。

この他にあげられた問題として、自己を優先しすぎている(1班)、わかっていても改善する勇気がない(1班)といった根本的な問題を指摘した班があった。さらに、妻のストレスが大きくなっている(1班)、家族員それぞれが健康を害している(1班)、子どもに目が届いていない(1班)など、食生活やコミュニケーション不足が原因となって起こっている問題に気づいている班もあった。

2) 問題解決のための方策(シナリオの記述より)

課題は「この家族の問題点を解決するために、家事分担についてこの家族になりきって考えてみよう。」妻の言葉「二人に考えてみてほしいこと

表1 授業実践クラスの人数(男・女)

クラス	人数	ワークシート分析対象者数
A	41 (26・15)	38 (23・15)
B	42 (27・15)	41 (27・14)
E	41 (20・21)	39 (20・19)
計	124 (73・51)	118 (70・48)

家庭科学習指導案

1. 単元 人の一生と家族

2. 単元設定の理由

現代社会は情報が氾濫しており、私たちにとって一番身近で大切な存在である家族についても多様な考え方がみられる。そのような中で青年期にある高校生にとって自らの生き方を主体的に考える力を育むことは不可欠である。しかし、生徒たちの日常生活では自分たちの家族について振り返ってみるという機会はほとんどない。また、目先のことにとらわれがちで、将来の生活を考えることは夢や空想に終わってしまい、現在の自分の生活を見つめ直すことにつながらない。

このような状況の高校生に対して、本単元では次のような学習を通して、生徒一人ひとりがどのような社会人に成長していくのか、どのような家庭を築いていくのかを考えるきっかけとしていきたい。

- ・様々なライフコースがあることに気づき、それぞれのコースにおける課題について話し合うことを通して、いろいろな人生の選択について考える。
- ・自分の生活設計を考えながら生き方への価値観を深め、家族との関わりの大切さについて考える。
- ・家族の生活時間を記入し、家族との関わりや家事労働の偏りに気づく。
- ・家事労働を家族で分担することの重要性に気づく。
- ・現代の食生活の課題にはどんなことがあるのかを考え、家族の食生活を振り返る。
- ・調理実習を通して家族の食事を準備することができるようになることで、家族の一員として家事を分担していくための調理技術を身につける。

3. 単元計画 (総時数20時間)

(1) 私の人生を築く	0.5時間
青年期の生き方を考える	
進路選択をするに当たって	
(2) ライフコースと生活課題	3時間
ライフサイクルとライフステージ	(0.5)
いろいろなライフコース	— (2.5)
ライフコースと生活課題	
ライフステージごとの発達課題	
(3) 家族と自分との関わり	16.5時間
家族・家庭とは	(0.5)
1日の過ごし方 (生活時間)	(1)
家事労働	(3)(本時)
食生活において	
*食生活指針をもとに	(2)
*実習を通して	(4)
*調理実習	(6)

4. 本時の題材 家事労働について考える

5. 本時のねらい

- 家事労働にはどんな仕事があるのかをあげていき、その多種多様性に気づく。
- 家事労働と職業労働とを比較することで家事労働の特徴をつかみ、家族の快適な生活のためには欠かせない仕事が家族への愛情を基盤にして無報酬で行われ、家族の誰か一人に負担が集中しているということの是非について話し合う。
- 家事労働を社会化していくとその負担は軽減されるが、多くの弊害を引き起こすことを理解する。
- 家事労働を家族で分担することの意義を資料を通して考え、自分も現在の家族の一員として、また将来家族をもったときの一人として、どのように家事労働と関わっていきたいかを考える。

6. 学習過程

過程	学習内容	生徒の活動	指導上の留意点・評価	分
導入	1. 家事労働の種類	(1) 日常生活の中で自分や家族がこなしている家事にはどんなことがあるのかを発表する。 ・衣生活に関わって…管理, 手入れなど ・食生活に関わって…調理, 片付けなど ・住生活に関わって…掃除, 草取りなど ・その他…家計の管理, 育児など	・衣食住, 育児, 介護など様々な分野にわたり, かなり多くの仕事があることに気づかせる。	13
	2. 家事労働についての課題	(2) 家事労働に関して色々な問題があることに気づき, 自分は現在および将来どのように関わっていくとよいか, 課題意識を持つ。 ・担当者の偏り・家族の意識の甘さなど	・家族の生活時間の調査をしたとき家事労働時間にはかなりの偏りがあったことを思い出させる。 ・一人ひとりが自分の課題として受け止めているか。	7
	3. 家事労働の特徴	(3) 職業労働と比較しながら家事労働にはどのような特徴があるのかを考える。 ・労働時間について・報酬についてなど	・家族の生活に欠かせない家事労働には何の補償も決まりもなく家族への愛情が原動力であるということに気づかせる。	15

展 開	4. 家事労働の軽減の方法とその弊害	(4) 家事労働を軽減するにはどのような方法があるのかを理解する。 ・企業が提供するものの利用・公共機関が提供するものの利用・地域の人たちとの協力できること・家族の協力や工夫でできること	15
	(前時の確認)	・家事労働分担についての考えを記入 (WS 1)	15
	5. 家事労働についての意識	(5) 企業や公共機関が提供するものの利用や地域の人たちとの協力では家族の生活に色々な無理が生じてくることに気づく。 ・経済的負担の増加・生活時間に合わないなど (6) 共働きで妻一人に家事が集中している家庭の現実の様子を示している文章 (資料1) を読んで以下のことについてグループ (3~5人) で話し合う。 ・この家族にはどんな問題点があるのか・解決方法は何か (シナリオ作成)	35
	6. 夫婦で家事を分担することの意義	(7) 主夫体験をした男性の家事に対する意見が書いてある文章 (資料2-1) を読んで、夫婦で分担してこなすことでお互いの大変さがわかり、お互いに労りや感謝の気持ちが生まれてくることを理解する。(WS 2)	15
ま と め	7. 子どもが家事を分担することの意義	(8) 母親がどんな気持ちで子どもに家事をやらせているのかを書いてある文章 (資料2-2) を読んで、家事をこなすことで子どものどんな能力を育てることができるのかを考える。 ・仕事をこなすことで自信を持つことができる ・生活技術を身につけることができるなど (WS 3)	15
	8. 家事労働についての意識の変化	(9) 家事労働に現在や将来どのように関わっていきたいのかを考え授業を通して家事労働に対する意識がどのように変化してきたかをまとめグループの中で意見交換をする。(WS 4)	20

資料1 「こんな日常どう思いますか。このルールから外れるわけにはいかない…？」³⁾

広島市西部のマンションに住む内山良美 (36) 一仮名一は、社員の夫 (36)、小学3年生の長男と3人暮らしで、共働き。11月のある日、「会議の資料作りがある」夫は、午前7時に栄養ドリンクを飲んで、出勤。寝るのが遅かった長男は布団でぐずぐず。今日も朝食を食べずに登校した。良美はトーストと牛乳で済ませ、職場へ。「朝は慌ただしいから、3人が食卓にそろうことはめったにない。一緒なのは日曜日くらい。」(夫) 昼、良美は会社近くの弁当屋で焼き弁当を購入。夫はコンビニで唐揚げ弁当とウーロン茶。どちらも五百円で釣りが来た。長男は給食。「うちよりおいしいし、みんなと食べるのが楽しい。」午後4時過ぎに帰宅した長男は、カップラーメンを食べ、スポーツ飲料のペットボトルを手に、学習塾へ急いだ。…略… 良美は夜中に突然息が苦しくなり、あわてて夫が病院に運んだことがある。過呼吸症候群。「原因はストレス」と医者に言われた。時々カラオケで気晴らしする。夫は肥満気味で、会社の健康診断では「中性脂肪が多い」。長男は今年二回、朝礼時に気分が悪くなった。担任から「寝るのが遅れ、朝食が食べられない悪循環になっているのでは」と注意された。「もう少し子どもにかまってやりたい」と良美は思う。でも、家のローンは残っているし、長男の学費も必要だ。「こんな時代だから、夫も自分もいつストラされるか分からない。」という不安も。このルールからは外れるわけにはいかない。

資料2-1 「男と家事 ― ぼくの体験から…」⁴⁾

通算すると1年になる「主夫」体験と、何年にもおよぶ共働き体験から、ぼくははっきりと断言できる。「この世に家事ほどメンドーなものはない」と。日々、連続と続く瑣末な労働。やっつけてもやっつけても、次から次へとわいてくる。まるで「もぐら叩き」のようなものだ。一服はあっても終わりはない。その厄介さにはぼくは驚き、あきれ、ときに嫌悪さえ抱いたものだ。だから、ぼくはぼくなり、肌でわかっているつもりだ。男たちがなぜ家事労働から逃げたがるか、女たちがなぜヒステリーを起こすか、を。だれだって生活の喜びを味わいたいと思って生きている。家庭を持てばなおさらだ。だが、楽しい一家だんらん、瑣末な家事労働の積み重ねの上に初めて成り立つ。しかも、だんらんが終われば、すぐに後片づけが待っている。「前後」の労働に純粋に喜びを感じる人が、果たして何人いるだろうか。…略… 「男たちよ、家庭に帰ろう」と呼びかけるのは簡単だが、個人の意思や努力ではどうにもならない部分があるのではないかと、そんなふうに思ったりもする。自立などという大げさなものではなく、せめて自活していけるだけの物理的余裕を、社会は男たちに与えてほしい一いま、ぼくは切にそう願うのみだ。そのためには何をしなければならぬか、男たちも真剣に考えるべきときに来ているようだ。

資料2-2 「家事は最大の能力開発」⁵⁾

さて、はるさんは、家事をやると勉強ができる子になる、と頑固に信じている。なぜなら家事にはセオリーがなく、どのような方法でやってもいいからよ。自分で好きなように工夫し、新しい発見があったらどんどん方法を変更して構わないし、手を抜きたくなったらいかに手抜きできるのが家事だから。思考することを身につけさせたいのだよ。…略… 布団の上げ下ろしという単純な家事だけで、おまえはいままでにどれだけたくさん思考し、検討し、行為し、実験し、発見し、修正しただろう。この繰り返しで、おまえの頭がすこしずつ良くなっていく、とはるさんは今後もずっと信じているからね。

ワークシート (WS) 「家事労働についてあなたは考えたことがありますか。」

1. 家事労働の分担について今のあなたの考えをまとめてみてください。
2. 家事労働を夫婦で分担することについて
3. 家事を子どもが分担することについて
4. 現在または将来自分の家族ができたときなどの家事労働に対するあなたの考えはどのように変わってきましたか。

があるの。充分なことではできていないけれど今家事は私が全てやっているわよね。でも、このままではいけないと思うの。」に続けてシナリオを作る作業である。

問題解決の方法として、家事分担や協力をあげた班が多かった。しかしながら、それらは妻からの強制であったり、子どもの訴えによる消極的なものである場合が多かった。また家族員相互の立場や考え方の違いを共有して解決策を追求するのではなく、「どうにかなるさ」「やればいいんだろ」「できたらやる」といった受身的、投げやりな姿勢で終わるパターンも多かった。また、問題解決のためのシナリオ作りであるにもかかわらず、決裂した状態で終わっている班が2班みられた。

これらの結果は、この資料1の家族の問題が簡単に改善できるものではないことに気づいている、あるいは家事労働を分担する必要性について理解はしているが主体的に実践する状況にない生徒たちの現実を反映しているのかもしれない。グループ活動の詳細およびプロセスを把握できないため、生徒相互の関わりとそれによる認識の変化を考察することはできないが、シナリオの展開から、理想と現実の間でジレンマを感じている様子が推察できた。とは言うものの、夫が田舎暮らしによって生活パターンを変えようとするストーリーや、夫や息子が可能な範囲で生活時間の持ち方を改善しようとするストーリーを考えた班もあり、共に食卓を囲み短時間でも団らんの時間をもつという家族の意思の大切さをシナリオとして表現できたことは評価できる。

以上のことから、資料1を通して食生活および家事労働についてグループで考えるという試みによって、多様な気づきはみられたが、背景にある問題があまりにも多様で複雑であり、生徒が自分の家族との関わりや家事への参加の実態をふまえて、短時間で相互に意味ある意見交換をすることが困難であったと推察される。いくつかのシナリオパターンを用意し、その中からグループで選んだパターンについて討議し修正するというような方法で意見を引き出し、相互の考え方や実態について考える場を作るなどの工夫も今後検討していきたいと考えている。

(2) ワークシートにおける個人の記述からみた授業中の認識の変容

1) 観点別記述の内容

ワークシート1の記述(家事労働の分担についての今の考え)とワークシート4(現在または将来自分の家庭ができたときの家事労働に対する考え方はどのように変わったか)の記述に焦点を当て、資料2-1および2-2の2つの資料に基づく学習を通して、生徒にどのような認識の変容がみられたかについて概観した。その結果、認識の広がりや深まりおよび情意的認識の変容、学習や実践への意欲などについて次の6つの観点に着目した。

- ① 「家事労働」の概念についての認識の変容
- ② 「家事分担」意識の発現、具体化及び意欲
- ③ 家事労働の認識における「バランス感覚」の発現
- ④ 情意的認識の記述
- ⑤ 家事労働を支える知識と技能の認識及び習得への意欲の発現
- ⑥ 消極的関与
- ⑦ その他
- ⑧ 変化なし・無記入

生徒の記述について、家庭科の教育、研究に携わる2人が解釈を行い、上記①～⑧のいずれかに相当するものを抽出した。判定が分かれたものについては、両者の合議・修正の上決定した。分断された記述からは①から⑥のどの観点に当たるか読み取りにくいのが、ワークシートの記述の全容から解釈できると判断したものもある。また、基本的にひとつの記述を1観点到てはめたが、若干複数の観点として読み取った例もある。観点別の記述を表2に示した。

① 「家事労働」の概念についての認識の変容

この観点では、「家事労働」という概念そのものについての認識が深まっている、広がっている、あるいは具体化されているといった記述を取り上げた。

主に「子どもが家事を分担することの意義」の学習、すなわち資料2-2「家事は最大の能力開発」を通して学習したことに基づいた記述が多かった。その記述には、「家事をやることにいろいろな意味が含まれているとは知らなかった」「家事を分担することは手伝う人のためにもなるん

表2 観点別記述()内数字は記述人数

① 「家事労働」の概念についての認識の変容

- A組男子「将来の自分のためにも」「家事をすることで子どもが成長するみたい」
- A組女子「家事を分担することは手伝う人のためにもなるんだ」「子どもに家事を分担させることについて、少し無理なように感じているけど見守ってやることも大切」「家事はお母さんがするという前提をくつがえされた」「家事を通して子どもとコミュニケーションをとりたい」「子どもには自分のことは自分でさせる」「家事をすることがたくさん意味をもっていてびっくり」
- B組男子「自分が家事を全て負担することはまずないだろう」「将来自分の家族ができたとき子ども(男・女かわからず)にも家事をやらせたい」「子どもであってもだれであっても」「家事をやることにいろいろな意味が含まれているとは知らなかった、家事をただ単にやるだけでなく、それによって何を得られるかを考えることも大切だ」「子どもがある程度大きくなったら子どもも家事を手伝っていくべき」「家族とのコミュニケーションにおいても育児においても家事労働は大切な要素を占めている」「家事をすることによって能力も養われることがわかったので」「家事がストレスになるようなことが決まらないうちから注意しよう」「家事労働は嫌でもしなければならぬイメージだったがその大切さがわかった」「家事労働を積極的にやれば全てがうまくいく」
- B組女子「実は家事ってやりだすとおもしろい」「将来子どもができたならいろいろな家事をやらせてみよう」「今は家事をするのはすごくめんどくさいけれど大人になったとき困るし、今の親と同じ立場になるので…」「家事労働に形として報酬はないので些細なことが喜びとなる」
- E組男子「自分を成長させるためにも必要だと思う」「家事をするには意志の力が必要で、またそれを鍛えることにつながっていることに気づいた」「家事労働はとてつらいものでとても大切なものだとということがわかったし…」「自分からやりませんがまだ言う気になれないと言われてたら自分のためと思ってやろうという気は出てきた」「子どもができたら年相応のできることをやらせたい」「子どもがいれば子どもにもできる範囲での家事を少しずつやっていってもらおう」「なるべく自分も積極的に家事をした方がいいと思うようになった」「家事は最大の能力開発とあったので結婚して子どもができたなら子どもに積極的に家事をさせよう」「将来的には必ずしようと思う」
- E組女子「子どもにもできることは手伝わせるべきだ」「子どもにも興味をもった家事だけでいいからやらせたいと思った」「将来は家事をやってくれそうな夫を選び子どもにも小さい頃から家事をやらせるクセをつけよう」「家事労働は嫌々やるんじゃないで、自分の得になると考えてすれば、今よりは家事の量が増えてくるんじゃないかと思った」「家事労働ははじめから無理そうなことを無理してやるのではなくて、できることから少しずつ幅を広げていくことが大切」「家事を協力してやっていくことで生活の質を向上し、子どもの発育や相手を思いやる心が生まれるならばすすんでどんどん手伝いをしていくべき」

② 「家事分担」意識の発現、具体化及び意欲

- A組男子「これからもさらに手伝って…」「何かひとつでも手伝っていききたい」「自分の周りにある何でもよいのでできることからしていきたい」「自分もやろう」「できることからやっつけよう」「できるだけ家事に参加」「しっかり分担して…」「積極的に分担していこう」(2)「家族で分担したい」
- A組女子「積極的に家事を手伝って…」「家族にできそうなことは少しだけでも手伝ってもらおう」「家族の負担を少なくするべき」「分担すればいいと口ではいくらでも言えるけれど実際にするととなるととても難しい」「ただ分担するといっても自分の現在の生活の中に家事を取り込むのは大変だと分かった」
- B組男子「少しは家事を手伝おうかと思った」「ある程度手伝おうかと思ってたがもっと手伝おうかと思直した」「できることは手伝うorやるのがいい」「自分もできるだけ協力したい」「いままでは家事はめんどくさいからやっていたけど今度から手伝っていききたい」「できる限り分担し…」(2)「家事は家族で分担し…」(2)「家族の中での家事の分担は大切」「家事分担の重要性がわかった」「家事をやれたらやるという考えから家事は分担してやるべきという考えに変わってきた。だから将来家庭をもったらちゃんと家族で分担して家事をやりたい」「ちゃんと分担して」「上手に分担してやったほうがいい。できることから少しずつ」「家事の分担は生きていく上で絶対必要なことであって、しっかり話し合っ解決しよう」「家事労働を分担することで一人あたりの負荷も削減されるので推進すべきだと思う」「やるべきなのはもちろんの事なのだが、それをするにおいてどのように行うべきか…」
- B組女子「家事は女性ばかりがするものではなく、できる人ができることをやることだと考えが変わってきた」「家事は家族のことなので家族全員で分担した方がよい」「家事は母親にまかせがちだったけど共働きなのでこれからは少し手伝おう」「手伝おうと思った」「できることから手伝っていききたい」「将来必ずしなければならないので今から手伝っておくべきだ」「一人に任せてはいけないうちは変わらないけど具体的にどうしていくかも考えられるようになった。夫婦で分担することの重要性をほんとに知った」「とりあえず家事を手伝えるところは手伝うべきだ」「家族で分担すべきもの。一人に偏らないように」「お互いが協力し合える分担を決めることが大事」
- E組男子「少しは手伝うようにしなければならぬ」「自分も何かできることをみつけそのための時間を確保しよう」「家事を分担してやらなければならない」「きちんとした分担をして共にある程度楽をしたい」「一方が主婦もしくは主夫でもまわりにいる家族ができる家事はする」「家事はできるだけ手伝うようにする」「一人でやるよりも分担した方がラクだしイイと思う」
- E組女子「小さな事でも皆で分担していくべき」「家事は夫と分担して」「家族にもやっつけようけど自分が中心になってやらないといけないのかなあと思った」「自分に家族ができたならやっぱりみんなに手伝ってほしいので今も手伝っておくべきだ」「自然とお父さんも家事に参加している…私も何かと手伝いをさせられるし…それが普通だと思ってたが、そうでないところも多いようだと思った」「もっともっと家事を手伝おうと思いました」「あまり人にまかせればなしはやめてできることからやりたい」「自分のできることは自分でやる」「まず身の回りのことから少し

ずつやっていきたい」「すすんでどんどん手伝いをしていくべき」「…をもてば家事労働は分担できるんじゃないかなと思うようになった」「…ようになって家事を分担してあげたいと思った」「自分ができるとは手伝っているけど、もう少し手伝う量を増やさないといけないと感じた」「いやがらずにちゃんとやろうと思った」

③ 家事労働の認識におけるバランス感覚の発現

- A組男子「近所づきあいとかもうまくやっていきたい」「一人に負担がかかりすぎないようにする、家族全員がある程度ゆとりをもって生活できるように家事を工夫する、みんなで家事をすることで家族にまとまりができるようにする」「自分のことだけでなくみんなのことを考えたい」「普段からできることをできる時にしておきなるべく周りに負担をかけないようにする」「時間的に余裕のない日もありますが10分でよいので助けになれば…」「積極的に家事に取り組める環境を作ることが大切」「子どもも含めて家族みんなが家事をすることが大切だ」(2)「家族一人ひとりがそれぞれをいたわり」「できる限り家族と協力してよい関係を築いていきたい」「家族の中で協力しなければならない」
- A組女子「言いたいことは言って相手への思いやりをもって家事労働をしてあげたい」「みんなですのを念頭に置き…」「一人に負担をかけてはいけないお互いが毎日にやりがいを感じられるように支え合うべきだ」「家族でお互いに気づかたりねざらったりすることから初めていけば良い」
- B組男子「休日少しくても妻の負担を減らすとともにコミュニケーションをとり続けることは家庭を保つために大切」「…分担し、コミュニケーションを深めるべきだ」「妻に全てやってもらえばよいと思っていたが自分も家事を手伝っていかないと家庭が崩壊してしまう」「自分ができる範囲でやれる時間をみつけ協力してやっていく。しかし自分には他にもやらねばならないことがあり無理なのかもしれない。かといって自分ばかりのことだけを考えていいのだろうか？できるだけという気持ちではなく必ずやるという気持ちをもって取り組めばきっと事情がかわるはず、きっと…」「家事はやるものではなくやってもらうものと思っていたけど、それがやる側にとってとても負担をかけていることがわかった」「要は家族一人一人が自分のエゴを捨て、家族のために尽くすべきだという考えに変わった」「分担次第で相手の気持ちが理解できるし、コミュニケーションが深まるし、やっぱり家事は家族みんなで共有するべきだ」「分担ができていないと家族も大変なことになる」「妻には家事をしてもらおうと思っていたが協力しようとおもった」「協力していくことがやっぱり大切だ」「相手の気持ちも考慮してよりよい家族をつくってほしい」
- B組女子「母親だって仕事があったりしたいことがあるだろうから頼りっぱなしではいけない」「家族が家事の大変さを知ること理解を深め、みんなで話し合ってお互いが協力し合える分担を決めることが大事」「できるだけお互い支え合うことが大切」「家事を分担しコミュニケーションを深めようと思う」「一人で専業主婦すると絶対すぐあきるからみんなでやりましょう」「将来家族ができたならみんなで分担していけるような家庭にしたい」「家族みんなでやるのがコミュニケーションにつながる」(2)
- E組男子「みんなが幸せに家族生活を送るためには互いがいろいろなことで助け合って生活しなければならない」「みんなで協力するというのが第一優先」「すべて母親まかせにしていたんではストレスもたまるし、交流も少なくなってしまおうということがわかったので」「できることは少ないかもしれないけど家族で協力して少しでも母親の負担を減らせるようにしたい」「共働きなら2人でそれぞれできることを分割してお互いの負担にならないようにする」「相手を思いやって家事を分担してすることが大切」「結婚とかしたときに少しでも相手の負担をやわらげるために頑張ろうと思えるようになった」
- E組女子「誰かにまかせっきりというのはよくない。家族で分担し助け合いながら生活することで絆も深まっていく」「分割して楽しく家事ができればいいと思った」「父も誘って少しずつやるようにしよう」「母だって忙しいんだから自分が手伝ってほしいなと思う」「家族みんなで協力して家事をしてほしいと思う」「これからは少しずつでも手伝って母がしたいことができる環境にしてあげたい」「実際体験して相手の立場に立って一度家事について考えることが大切」「人それぞれの事情があるから仕方ないけれど、みんなが思いやりの心をもてば…」

④ 情意的認識の記述

- A組男子「感謝し協力していこう」「家事で親にかけている負担は大きいし」
- A組女子「ご飯を食べた後に…感想を述べるようにし家事をしてもらってありがとうという気持ちだけでも表現するように気をつけたい」「家事をする人に対する心遣いが大切だ」「家族でお互いに気づかたりねざらったりすることから始めていけば良い」
- B組男子「自分の分担ではないところでもやってくれたことに対して感謝の意を表すべき」
- B組女子「やってみてありがたさを実感したら良いと思う」「母親も働いているから大変だと思うので」
- E組男子「母親が大変なんだらうということは想像できているので」「家事をしてくれている人に感謝しないといけない」「ご飯を作ってもらったときおいしかったという一言で相手の気持ちをよくさせるので感謝の気持ちを表したい」
- E組女子「主婦は楽でいいと思っていたがやりたいこともせずに頑張ってくれているのだからご飯とかも感謝して食べたい」「今お母さんに感謝してできることをできるだけたくさんしたい」「普段母のやっている家事を考えてみるとたくさんのお母さんをしてもらっていると感じ苦勞が伺えた」「家事をしている人に対して感謝の気持ちをもつ」「毎日3食作る母はすごい、できることは私もやってやってくれたことにはしっかり感謝したい」

⑤ 家事労働を支える知識と技能の認識及び習得への意欲の発現

- A組男子「洗濯とかはしているが大丈夫」
- A組女子「料理といったことを急にやることはできないが」「高校の頃から家事に少しはたずさわるようにしたい」「自分が自立しなければならないけど」「積極的に家事労働をしようと思う」「今までめんどくさいしやっても意味がないと

思っていたけど家庭は生活の学校だと思った」「家事労働の大変さを知り」

- B組男子「今日の授業で改めて家事の大変さがわかった」「やはり家事は大変なようで…」「すごく大切だし」「家事労働は思っていたより大変だということがわかった」
- B組女子「今のうちにきちんとやりたい」「今まで家事をやるのはめんどくさくて嫌だと思ってやっていたけど…やってみようかなあ…と思うようになった」「楽なことではないし単純な作業の繰り返し」
- E組男子「家事を毎日することの大変さを理解し、自分ができることを積極的にやっていくことが大切だ」「将来は自分の父親みたいに食事をまったく作らないようなことはせず早く帰る方が食事を作っておくようにしようと思った」「将来自分の家族ができたときも自分でできることは自分でするようにして積極的に家事をしようと思った」「やっぱり家事はやってみないとその大変さがわからないのでやってみよう」「一人暮らしするときなどに備えることも含めて家事労働を手伝ったりすることが大切」「自立しなければならぬし」
- E組女子「自分も何かやらなきゃいけないかもしれない」「今から少しずつでも頑張ればできるようになるかもと思う」「共働きをしながら家事もきちんとこなせるようにしたいと思ってたけど実際は栄養のことをきちんと考えなければならぬし子どもの面倒もみなければならぬという問題点がたくさんあることに気づいた」「おいしいご飯をつくってそれを家族と一緒に食べることがすごくいいからやりたいと思った」「今までは思っていただけだったけど自分で料理をしたりしてみようかなと思った」「一人暮らしをするときは自分で料理を作るようにしたい。外食を買って食べるのをできるだけ避けて…」「できることをやるだけじゃなくて、できなかったこともできるように…」「家事が本当に大変なものだと知って…」

⑥ 消極的関与

- A組男子「やっぱり奥さんのことをいたわっていくべきだと思った」
- A組女子「他にやる人いないんだから自分がやるっていう心意気です」
- E組男子「絶対に消えない重し、家庭生活を送る事の代償」「暇な時は親の手伝いの真似事ぐらいやっておくべきかなと思った」
- E組女子「今でもちゃんと手伝いをしているけど3のようなこと(家事が能力開発に役立つこと)が本当にあるのかと思った」「前から不安だったけどますます不安になりました。自分にはできそうになくなって悲しくなりました」

⑦ その他

- A組男子「家族を宝物だと思える心が必要」
- A組女子「やっぱり結婚したら専業主婦がよいです」

⑧ 変化なし・無記入

- A組男子「(できる範囲で→) 変化なし」「(みんなで頑張るべきです→) 別に変わってませんよ」「(最低でも一人一つは分担すべきである→) 変化なし」「(家族の人が平等な量やるのが好ましい。専業主婦の場合ほとんどするべきだ→) 俺の人生観はこんな100分で変わるほどよくありません」「(一人一人の負担が等しくなるように分担する。それぞれが自分の得意な家事をする→) 特に変わらなかった」
- B組女子「(面倒、やりたくない→) 変わらない。結局家事をやらないことのどこが損なのか」
- E組男子「(家事労働は家族で分担してするべきだ→) 変化なし」「(家事の分担をすることにより一人にかかる負担が減る。仕事をしている人などに言わせれば「仕事が増えた」というかもしれないが協力し合えるのが家族だと思う→) 別に変わってはいない」

だ」といった記述にみられるように家事労働に対する客観的な見方が変わったものと、自分や子どもにとっての家事労働の価値という観点で記述しているものがみられた。後者には「家事は自分を成長させるために必要だと思う」といった現在の自分についての家事労働の価値に気づいているものと、「将来の自分のためにも」「将来的には…」「子どもができたならさせよう」など、将来の自分や子どもをもった親としての視点で記述しているものがみられた。

② 「家事分担」意識の発現、具体化及び意欲

この観点では、「家事分担」の必要性や重要性への気づきおよび分担への意欲を示している記述を取り上げた。

これらの記述は、資料1に基づくグループ活動

によって家事労働について考えたことと、資料2-1「男と家事一ぼくの体験から…」を通して学習したことが反映されているものと思われる。事前に家事分担の必要性や重要性はわかっていたが、「もっと」「何かひとつでも」「できることから」「積極的に」手伝いたい、分担したいという意欲についての記述が多くみられた。また、「具体的にどうしていくかも考えられるようになった」「自分のできることは自分で」「まず身の回りのことから少しずつ」といった具体的な方策に関する記述がみられる一方で、「実際にするとすると難しい」「現在の生活の中に取り込むのは大変」など、具体化しようとして初めてその難しさに気づいたり、自分の生活を見つめているものもみられた。概して、男子より女子の方が記述に具体性と深まりがみられた。これは、現状の家事労働分

担の中で、女子の方が性別役割について意識する機会が多いことが理由として考えられる。

③ 家事労働の認識におけるバランス感覚の発現

ここでは、家事労働についての認識が、他者や協調を意識するものとして解釈できる記述、あるいは家事労働に関わる際の時間や労働力のバランスに対する必要性の気づきが見られる記述、生活を構成している多様な要素の再認識に関わると考えられる記述を「バランス感覚の発現」として取り上げた。

他者意識は、父親、母親、親、妻（将来の配偶者）、家族、近所に対して記述されていた。特に母親の生活実態、問題点、および負担軽減に触れている記述が多くみられた。「すべて母親にまかせていたんでは交流も少なくなってしまうということがわかったので…」といったように、母親の家事分担の状況が家族全体のコミュニケーションに影響を与えていることに気づいた記述は特筆すべきである。時間や労働力のバランスに関する記述は、家事分担を行うための具体策としてもとらえることが可能な内容が含まれていた。自分の現在の生活の中で自分自身の生活設計のためにやらなければならないことと、家族の中の自分の立場を意識したときにやらなければならないことの間でジレンマを感じている記述もみられた。これらは価値観形成における情意領域の「価値付け」「組織化」の発現ともとらえられる^{2) 6)}。

④ 情意的認識の記述

この観点では、「感謝」「ありがたさ」などの記述を取り上げた。③の他者意識と重複する記述もあるが、ここでは感謝の気持ちが表現されている記述に限定した。文脈上、他の観点と同時に記述されることが多い。ここで記述がない場合も、このような他者に対する思いをもっていることが推察されるが、実際にこの記述がみられることは価値観形成における情意領域の初期目標としてあげられる「受容」「反応」の過程⁶⁾で意義があるのではないかと考える。

⑤ 家事労働を支える知識と技能の認識及び習得への意欲の発現

この観点では、家事労働を支える知識と技能お

よびその大変さを再認識している記述、実際に家事分担を行うためには関連の知識と技術が必要であることに気づいている記述、およびの習得への意欲がみられる記述を取り上げた。この観点も他の観点、特に②や③とともに記述されることが多いが、具体的な行為をあげて意欲を示している記述をあげた。

単に「手伝う」「分担する」「家族のために」「感謝して」という段階から、「実際は栄養のことをきちんと考えなければならぬし…問題点がたくさんあることに気づいた」「できることをやるだけじゃなくて、できなかったこともできるようになって…」などの記述レベルへの移行は、必要な知識や技能がなければ家事分担やよりよいコミュニケーションや各家族員の自立などは不可能であることを認識しているものと推察される。このことは、家庭科学習全体の意欲につながり、授業者のこの授業の意図を反映した到達目標に添うものでもあり、さらに多くの生徒に望まれる記述である。一方でマイナス面のみを認識している記述も多く、①の家事労働の意義と対応させてとらえることも必要であろう。

⑥ 消極的関与

消極的関与としてとらえた記述には、生徒独自の価値観や家庭環境の影響などに基づく場合と授業のテーマに対する関心のなさが背景にある場合とがみられた。いずれも消極的な認識あるいは態度ではあるが、授業を通して自己の家事労働に関する認識を改めてみつめている点で「関与」とした。これらは若干名であるが、家事労働に関する認識変容や価値観形成には個人差があることが示唆された。

⑦ その他

省略

⑧ 変化なし・無記入

限定された時間の中で価値変容を迫ることの困難さを示唆しているが、一方でワークシートの記述だけでは内面的な変容はとらえきれないことも事実であろう。

表3 家事労働に対する認識の変容を示す記述数

変容の観点	記述数	男子		女子	
		記述数	男子数(70名)に占める記述数の割合(%)	記述数	女子数(48名)に占める記述数の割合(%)
①「家事労働」概念の深化	38	22	31.4	16	33.3
②家事分担意識	63	34	48.6	30	62.5
③バランス感覚、他者理解、協調	49	29	41.4	19	39.6
④情意的認識	16	6	8.6	10	20.8
⑤家事の知識と技能の再確認、必要性	28	12	17.1	17	35.4
⑥消極的関与	6	3	4.3	3	6.3
⑦その他	2	1	1.4	1	2.1
⑧変化無し・無記入	8	7	10.0	1	2.1

2) 観点別記述の全体的特徴

表3は認識の変容を示す記述数を観点別男女別に示している。最も多くみられた変容は②「家事分担」意識の発現であり、118名中63名であった。次いで③①⑤も全体の1/4以上に記述がみられた。χ²検定の結果、⑤と④は女子の方が有意に記述数が多かった(⑤ $p<0.05$, ④ $p<0.1$)。これら2つの観点は①②③とともに発現することが多く、女子の方が家事労働についての認識を深めているのではないと思われる。

表4に認識の変容を示す記述の数を男女別に示した。男女ともに1件あるいは2件が多く、最も多かったのは4件であった。女子の方が複数回答が多く、家事労働について多面的にとらえていることが示唆された。

表4 家事労働に対する認識の変容を示す記述の個数

記述個数	男子		女子	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
1	27	38.6	11	22.9
2	28	40.0	26	54.2
3	8	11.4	9	18.8
4	0	0.0	1	2.1
変化なし・無記入	7	10.0	1	2.1
計	70	100.0	48	100.0

資料1に基づく討論は、その時点ではほとんど効果がみえないが、「分担しないと大変なことになる」「崩壊する」「現実うまく分担することは非常に難しい…」など、最終的に家事労働を多様な観点から、多様な方法でとらえることや価値を主体的に吟味することに役立つものと考えられ

る。また、ワークシートの記述に関してクラス集団や身近な友人に類似の内容がみられ、相互に影響を及ぼし合っていることが推察された。

4. まとめ

学習者の家事労働に関する認識の変容をねらった授業を実践し、グループ活動および個人作業による記述から変容の様子を分析した。

個人差はあるものの、本授業によって9割以上の学習者に何らかの変容がみられ、3種の資料教材による刺激、それらの相乗効果およびグループ活動の効果が読み取れた。認識の変容の観点として6点をあげたが、それらは、家事労働の理解と概念化といった認知領域と、家事労働に対する関心、意欲および態度形成の起点の発現といった情意領域に大別できる。さらにそれらの観点は、実践に向けての多様なレベルを含んでいることもみてとれた。また、本研究では、少ないながら家事労働に対する消極的あるいは否定的な認識も授業によって生じた変容ととらえたが、このような家事への積極性という点からも変容を類別することができよう。情意領域の変容においては、「受容」「反応」「価値付け(価値の知覚)」「組織化(価値相互の関連性の気づき)」のレベルがみられた。

また、知識を使って思考を働かせ、現実の問題を分析し、目的に向けて統合し、価値判断によって意思決定し、その実践の評価をフィードバックしていくという生活実践力の育成に必要な一連の知的な働きの中で、意思決定に至る認識や価値形成の一端がこの授業で達成されたのではないかと考える。このことは授業のねらいの達成にも無関

係ではない。

価値観の形成に通じる認識の変容を単元や教科学習でねらうことについては、生徒の成長発達の特徴や家庭、学校、社会環境要因を背景として、短時間で性急な要求をすることはできない。しかしながら、生活を直接学習対象として扱う家庭科では、生活事象に対する学習者の認識を授業後の変容も含めてみつけ、授業にフィードバックさせることが必要である。本報では授業の中で生徒が相互に意見交換する場と家事労働に関する多様な価値に触れる機会を設けたが、それらの場がさらに学習者の認識の変容に効果的に作用するような指導方法を工夫し提案していきたいと考えている。

参考・引用文献

- 1) 鈴木明子・平田道憲・小林京子・高橋美与子：「家庭生活事象に対する学習者の認識をふまえた授業開発に向けて－高校生の「生活時間」に対する認識の実態－」広島大学学
- 部・附属学校共同研究機構研究紀要第33号，pp.357-367，2005.3.
- 2) 福田公子・平田道憲・木下瑞穂他：「家族・家庭生活の価値観の形成に関する授業の効果」広島大学教育学部関係附属学校園共同研究体制第26号，pp.149-156，1998.3.
- 3) 西日本新聞社「食くらし取材班」：『食卓の向こう側1』西日本新聞社，2004.
- 4) 成澤壽一編：『これからの男の自立』より山下了一：「男と家事－ぼくの体験から」日本評論社，1998.
- 5) 下田治美：『単身家庭の呪い』情報センター出版局，1987.
- 6) 梶田叡一他：『教育評価ハンドブック』第一法規，1981.
- 7) 文部省『高等学校学習指導要領解説家庭編』開隆堂，2000.
- 8) 中間美砂子編『家庭科教育法－中・高等学校の授業づくり－』建帛社，2004.